

「なんの！ そんな心配はいらぬことだ。お前さへ押して行けるなら、もう一呼吸。このまま宿まで行くことにしやう。」

氣を張つては云ふが、吐く呼吸もいかに苦しうだ。

「お父さん、どうかなさいましたか？！ 少し道端で休んでまわりませうよ。」

十一二の娘とは思はれない、ませた口の利き方。父の苦しうな様子を見て、ハラ／＼と心配しながら、

「ねえ、さうなさりませ！」

「うむ。さうか。それでは少し休んでからまたまわる事にしやう。意地にも、胸が苦しくなつて歩けぬのだ。本當に僕の身體も弱うなつた。」と、情なさうにぐ／＼つたりと、その道端、楊柳の根株に腰を下した。

暮るるに早い冬の夕闇、はや四邊には通ひ寄るやうに立ち籠めて、人の面さへ臙になつた。

「まだお家までは、どの位かかるのでございますか？」

「さうさな。お前と僕の足取では、普通の人の半分も一日に歩けぬ。どうしても半ヶ月位はかかるか。」力ない聲で、急にゴホ／＼と咳き込んだ。

「お父さん／＼。」と、娘は背に廻り、苦しうに咳き込む父の背を擦りながら「どうぞ確りして下さいまし。」

「もうよい。もう……よいのだ。」

なほも苦しい咳嗽を續けた。そしてあつと云ふ叫びと一緒に、口からたら／＼と吐き出した牡丹花のやうな血塊。ばつたりと地面へ打伏して激しい呼吸づかひ、苦痛の唸きにつれて肩がまるで浪打つやうだ。

「お父さん……お父さん……」

娘は父の肩へすがり、背を擦り、おろ／＼とした涙聲。

「心配……心配するでない。もう……もう大丈夫だ。」

起き上る元氣もないが、無理に氣強い聲を張つて、娘に心配させまいとする心遣ひ。子供心にもそれが分ると見え、悲しさうに、

「私、どなたか呼んでまわりませうか？」

「いや、そんな所爲をするでない。どなたに来て頂いたつて、僕の胸の痛みが治るわけでなし、加之にもう直にようなるわ。そんなに心配せいでよい。この淋しい街道、人家さへも近所には

見えぬではないか。お前に行かれて了つて、儂一人でここに待つてるのは耐らないことぢや。もう少し落ちつけば、屹度ようなるからな。」  
 夕暮の肌を裂くやうな冷い風。雪を頂く峯から颯と吹き下しては、凍てた街道の落葉を舞ひ立たせた。

娘がかじかんだ指先、口先で温める吐く息さへ凍りのやうに感じられる寒い道端、大地へ打伏して居る父親の面は血の気がなく、夜眼にも蒼白く、死人のやうだ。

先刻からこの父娘連れの跡、見えがくれに跟いて来た旅商人風な小粋な二十七位位の年頃の男、この時、づか／＼と街道から外れて、今更に氣づいたやうな風で、

「この寒い夜、日が暮れて間もないとは云へ淋しい街道、往來の断絶えた道端で、どうなさつたのですえ！ まさか父娘連れで、野宿をなさる方とも見受けられない。それにそんな所爲をして地面へ打伏して居ては、小半時もしてこらんせえ。凍え死んで了ふぢやありませんか。一體お前さんたちはどうなすつたのだ？」

父娘の側、屈みながら透して見た。

「はい、どなたか存じませんが、有り難うございます。御覺の通りな病み上り、長の旅を續けて

まわりました所、急にここで苦しみ出し、弱つて居るのでございます。」

「さうかい。それは定めしお困りだらう。それに足手纏ひな娘さんまで連れて！ お前さんたちどこまでお出でなさるね？」

若者は親切な調子で訊ねかけた。

父親は起き上つて、苦しい呼吸の下から何者であらうかと、急に現れて来た若者の旅姿、まじ／＼と眼を据えた。

「は／＼／＼、何もさうお疑りになるには當りませんや。私は旅から旅を行く絹商人、丁度、ここを通りかかると道端で、お前さんたちのうごめく怪しい影と唸き聲。實はぎよつとして暫くあそこで、様子を伺つてましたが、御病人らしいので、ホツと安心して話しかけたわけでした。」といかにも氣安く、話しかける。

「左様でございますか。儂も實は京都で長らく商業を致して居りましたが、この娘の母が四年前からの長病ひ、昨年春に癆病で死んで了ひましたが、それからは此度、儂が同じ病にとりつかれ、そんなわけで店も畳んで、かうして故郷の太原府へ歸る所でございます。儂も御覺の通りな業病、もう長いことも御座いませませんが、この娘を一人、残して逝くの忍びません。幸ひ故郷に

は年老つた両親もまだ健在で居りますので、この娘の行末など頼んで死にたいと思ひまして、このやうに無理な旅を致しますのぢや。」

「それはどうも、お話を聞くだけでも本當にお氣の毒なお身の上だが、何もお前さんの病氣が、癆病だからと云つて、屹度死ぬものとは定つてゐない。随分と助かつて長命をして居る人もあるのだから、そんな氣の弱い事を云はず、故郷へ歸つてゆつくりと養生をなさり、もう一旗あげなされるがよいさ。」

「御親切なお言葉。本當に身に泌みて嬉しうございます。しかし儂はもう助からぬものと覺悟を定めて居ります。」

父親は全く死を觀念して居るらしく、いかにも沈んで云つた。

「ただこの娘を祖父母の手へ渡さぬ内は、死ぬにも死にきれません。」

「まアさう氣を落しなさんな。老少不定は世の慣ひ、誰が死ぬとも定つたものでない。私だつて明日が日に、どんな事でぼつくりと死んで行くかも知らないんだ。おう、さうだつた！ 私が持つて居る癆病の妙藥、すつかりと忘れて了つて居つた。或る高貴なお坊さんから分けて頂いたのだが、自分がこんな丈夫なので、すつかりとそんなことを忘れて了つて居つた。どうだ！ お前

さん、騙されたと思つて飲んで見るかね？ それに今夜はどこの泊りだ？ 三里莊なら私も同じ宿。お前さんも歩くのが大儀なら、私が背負つて行つてあげてもよい。ここからは目と鼻の所、さう大した道程でもないんだからな。」

「そ……そんな御迷惑を！」

「いや、心配することはない。それから藥は觀面に利くのだが、直ぐに飲んで見るかね。苦しいやうならば飲んでみたらどうだ？ それとも宿へ着いてから……」

「いえ、甚だ勝手ではございますが、ここで……ここでその藥、頂かして貰ひたうございます。」  
地獄で佛の喜びやう、溺るる者が藥を握むと同じやうに、ただ目前の苦痛から遁れたさに、前後の思慮を失つて居つた。

「さうか。それでは少しお待ちなせえ。」

若者は腰に下げた袋から取り出した粉藥。

「藥はこれだが、困つたな、水がねえ！」

「いえ、水は儂が持つて居ります。小壺に入れて娘に持たして居りますので……」

父親はわな／＼と顫える手尖。押し頂いてその粉藥。娘の渡す壺の水と一緒に呑み下したの

だ。

「どうだ？ 少しは収まつたかね？」

「はい、有り難うございます。どうやら餘程心地も宜しいやうです。」

「さうかい！ さう早く利目もあるめいが、まア良くなれば結構だ。では何時までこんな寒い道端で、ぐづぐづしても居られめえ。少しも早く宿へ行き、温まらうぢやねえか。さア遠慮なく、私の肩に握りなせえ。」

若者は氣軽く、父親の前へ背を向けた。

「それではお言葉に甘へ、全く恐れ入りますが、どうぞ宿まで御面倒をお願ひ致します。渡る世間に鬼は無いとは、よう申しますが、僕は赤の他人の貴方が御親切、涙が溢れる位に嬉しう、有難く存じて居ります。」

「何も、そんなに有難がる事アねえさ。袖摺り合ふも多少の縁。人間はどこでどうなるか分らんえものだ。」

若者は話しながら、暗の街道、父親を背負つて娘をつれ、二三丁も来たかと思ふ頃。

「うむッ。」と云ふ激しい苦悶の叫び、背負はれた父親は身もだへして苦しんだ。

「どうしたのだ！？」

若者は急に今までと變り、邪剣に背負つた父親を大地へ振り落して、七鞭八倒、苦しみ抜く姿を尻眼にかけ、

「人の背中でジタバタと、三ツ兒ちやあるめいし、勝手な所爲をして呉れるな。一體どこがそんなに痛えと云ふのだ？」

冷い聲で訊ねながら、その側へ寄つた。

「胸が……胸が焼けつくやうに苦しい……水を……水を……」切り夢中でもがいて居るのを見て、娘は更にはら／＼として、

「お父さん……お父さん。どこがお苦しいのでございますか？！」

「胸と云つたな？ ここかね！」と、若者は父親の胸のあたり「こ……この邊かね？」

「あッ、そ……それは……」

「矢釜しいッ。」若者は父親の懐中からす／＼と引き出した胴巻。ニヤリと笑んで、

「昨日から眼をつけたお前の懐中、蛇が睨んだ蛙も同然、ここで吞まうとは思はなかつた。親切てかしの癆病の妙薬、あいつは斷腸草と云ふ毒薬さ。どうせ遅かれ早かれ死んで行くお前の身。」

一日も早く苦しみに極楽へやつてやるんだ。俺は街道荒しの劉達兒と云ふ少しは人に知られた泥棒さ。冥途の土産に聞かせてやらア。毒々しく云ひ放つた。

「えッ、それではおのれ、儂を……儂を」と、身もだえしながらしがみ附かうとした。

「やいッ、亡者奴！」ボンと足をあけて蹴返す拍子、ばたりと父親は仰向けに、うむと云ふ苦しい悲鳴、起き上る力もなく、口からはたら／＼と流れ出す血潮。

「あれえ——」と、懸命に振絞る娘の叫び。

「静にしろい」ぐツと遁げやうとする娘の襟髪「騒ぐと生命がねえぞ。」

どツと父親の所へ、突きのめすと、くるりと背を返し、章駄天走り、暗を幸ひに元來た方へ、街道を真直ぐに遁げ去つて了つた。

暗闇の街道、娘の泣き叫ぶ聲と死んで行く父親の唸き聲だけが疾く残つた。

### ぼつかりと蒼白い花舫

「それが今から彼此八年前のことさ。餘り寢醒のいい仕事でもなかつたので、今でも思ひ出すと氣持ちが悪い。」

劉三は、芦の茂みへ舳を突込んだ船の上、暗い夜、降りさうに曇つた空を仰ぎながら物語つた

「成程な、そいつは少し悪ど過ぎらア。あついだつて船頭は表稼業、いいことはして居らねえが

お前さんのやうに思ひ切つた事はまだやりませんや。」

船夫も碎けた調子で相槌を打ち、

「だがどうも最初から絹商人とは受け取れなかつた。どこか臭え所があると睨んだのは外れず、

蟒の道は蛇とはよく云つたものさ。」

「劉三なんて云ふなア、假の苗字だ。劉達兒と云ふお尋ね者さ。丁度、一ヶ月許り前、この土地

へ流れ込んでくると、シヨイと眼についたのは、あの新春樓の嬌鶯。それが年頃と云ひ、幼な顔

暗い夜のこと明瞭はして居らなかつたが、どうも太原府街道で殺したあの爺の連れッ兒に相似

なのだ。不思議なこともあるものとは考へたが、うっかりした事も口走れず、その内、すつかり

と此方が參つて了ひ、日毎夜毎に通ひつめると云ふのほせ方。ところが俺が熱くなればなる程、

あいつは嫌にこの俺を嫌やアがつて、遠慮なく跳ねつけるのだ。こんな事ア自慢にはならねえが

俺はこの年になるまで、あんなにまで振られた妓は始めてなのさ。餘程本音を吐いて、一遍でも

自由にして呉れやうかと思つたのだが、どこまでも堅氣な旅の絹商人。今夜は乗るか反るか一芝

居。あの妓の意地と張の賣物につけ込んで、先刻のやうな狂言を演つたのだ。」

「へッへ、、、今夜は姐さん、餘程考へ込んでゐなすつた。殊によると旦那、うまく當るかも知れませんか。」

「さうよなア。俺も自分ながら餘りうますぎるので、感心をしてゐたが、ここまで槽ぎつけて駄目なら破れかぶれ、俺の考へ通りして風を喰ふばかりだ。」

「大丈夫でさア。今夜の調子だと、反對に旦那へまゐつて來まさら。しかし十兩の紙包、河へ捨てるのは惜しうござんしたな。」

「あんなもの、手前は本當の金と思つてるのかい?! 互かけだよ。」

「へえ、さうですか。大方そんなことだらうと思つた。實はあつしは明日、あの河底を探してみやうとは考へたが、一應旦那へ伺つてみてからと思ひやしてね。」

「ふむ。この寒空に、風邪引くのが儲けものになる許りだ。若い僻に汚い慾をはらねえがいいやな。」ニヤリと笑つた。

「へえ。だが旦那、婿駕姐さんも今夜は満更でもねえ御様子だつたが、この先、どうなさるお積りですかい。」

「さうさ。どうなるか、今の所は見當もつかねえ。どうせ引ツ張り出しやア高飛びさ。飽きがあれば金に替るばかりだ。さう勿體振つて有難がる程のことアねえが、今までのやうにああ意地になつて嫌やアがると、つい俺だつて意地づくでも落してみたくなるのが、持つて生れた意固地の病さ。」

「へッへ、、、旦那は二枚目も行かうと云ふ悪なんだから、こちと等は本當に齒も立ちませんや。」

「詰らねえお世辭は止めて呉れ。」

その時、眞暗な堤の上、人の動く氣合がして、透き通る疎とした聲、

「旦那、いやさ劉三さんとやら、残らずの話はここで伺ひました。さう云ふ芝居とは露知らず、最初から虫の好かぬ方と思つたが、今夜の殊勝ないぢらしさ、つい乗せられて旦那の船、堤の暗を幸ひに、櫓拍子の音を頼りに跡を追つてここまでまゐりました。そして聞くともなしに聞けば昔の父の仇。太原府街道で殺された爺の連れた娘は、私でござんした。よく何もかも話して下さつた。これも皆父が仇への引き合せ、このままお訴へして、すぐと仇は討つて貰ひますから……この珠江へ這入つたなら、袋の鼠も同じこと、今更逃げやうとしても、もう逃げられはしません

ぞえ。」

「やッ、おのれは嬌鶯。では今までの話、聞いて居つたのか。」

劉三は齒がみをして口惜しがり、

「船をつけるッ。あいつを生かして置けぬ。」

船が岸へどしんと打つかると同じ、シヨイと堤の暗、身を躍らして、逃げやうとする嬌鶯の跡一散に追つて行く。

「やいッ、待てッ。」

むんづと握んだ妓の袖、引き戻さうとする。

「何をなさるのです？」

「手前の生命を貰ふばかりだ。」

キラリと光る短刀。劉三は逆手に持つて、さツと嬌鶯の脇腹めがけて一突き。

「あッ。」と魂消える悲鳴。「人殺しい——。」

ばたくと三四歩、走るとばつたりと堤の上へ倒れる。また起き上つて走らうとする上へ馬乗りとなり、ぐさツと胸へ刺し通した。

「人……人……」

廓近く、大勢の人の走つてくる様子だ。

劉三は身軽く、堤を駆けると芦の茂み、ボンと待たしてある船の上。

「どうでした？ 旦那。」

「やつつけて了つた。すぐに中央へ船を出して呉れ。誰か追手がかかるかも知れねえ。」

呼吸せわしく云つた。

暗い中流へ船が出た時に、堤には提灯の影が西に東に走つて、何やら壁高にわめくのが遙に聞えて来た。

「あんな人通りの多い所で、危いことをなさいますね。でも誰にも見とがめられねえで、ようがした。」

「しかしお前と俺の話、聞かれた彼奴は生かして置けねえからな。それに太原府街道で殺した爺の娘ときけば、なほ更、俺にとつては薄気味悪い女だ。」

「因果は廻る緒車とか、何とか云ひますが、全く不思議なものでございますね。」

「やッ、あの畫舫は何だッ？」

「えッ」と、振向いた船夫、すぐ側を見ると、今までに何も無い、漆を流した真暗な江上。ぼつかりと薄着白い光に浮いた花舫が一艘、する／＼と此方へと近寄ってくる。

「あッ。」と云ふと、船夫は船へがばツと打伏して了ひ、がた／＼と顫え出し、

「お……お助け。南……南無阿彌陀佛……」

「うむッ。おのれは嬭篤だな。何だ？ 恨みを報いに来た？！ 洒落くさい事を吐すな。太原府衙道で殺した老耆奴。手前はまた何で、今まで生きて居つたのだ。此度こそ兩人とも一遍に呼吸の根を、留めてやるから覺悟しろッ。」

劉三は、蠢乎と物狂ほしい様子で立ち上つて、大聲にわめき散した。

「嬭篤！ おのれは笑つて居るな。手前は俺の恐ろしいのを知らねえのだ。老耆と兩人、此度こそ、本當に地獄の底へ叩き落して呉れるわ。」

一人で物狂ほしく叫んで居つたが、

「やい、遁げるな。あッ——」と云ふ叫び、ざんぷと落ち込む高い水音。

船夫がこわ／＼と頭をあげて見た時。そこには元の真暗闇、蒼白い花舫の影もなく、沼の底のやう澱んで見える江面、劉三の姿は見えなかつた。

## 非人嚮宴

### 名人と偽物李鐵丸

秋も更けた錢塘江口、潮の高鳴る音はいよいよ冴えて行つた。

世にも珍しい丈餘の高さ、數里にわたる大うねりの潮が、一日に幾遍となく浪頭を亂して、江邊近くそそり立つ海寧城を一呑みの勢ひすさまじく、大洋から湧き立つ音も高く、ひた押しにのぼつて來るのである。

「おう、素晴らしい偉觀ぢや。話に聞いた錢塘江の潮、かくまで壯大なものとは思ひも寄らなかつた。」

海寧城門近い、鼓樓に立つた李鐵丸。年頃三十前後、太刀を背負つた身丈四尺二三寸の小男、引き締つた面、日に焼けて、眼ばかり鋭い光を湛え、背丈よりも高い四尺八寸の棍棒を右手に、キツとした様子、潮の湧いては砕くる海面を見遣つた。

この者が當代、棍棒の名人として聞えて居る少林寺の李鐵丸とは、誰も一寸は考へ及ばぬ位、見すばらしい風をして居つた。



「それに何と云ふ豪い人出なのだ?」と、鐵丸が漏した通り、その城下、遙か離れた錢塘江口から海岸一帯、年中行事の一つである秋の潮見物にその日、水軍の演習のあるのを觀に來た人たちが蟻の通ひ出る隙もないやう眞黒な山を築いて居るのだ。

「どれ、折角通り合したものだから、水軍の武者振り、ゆつくりと見物して參らうか。」と、汗と埃にまみれた袖を拂ひ、右手に握んだ棒を力強く突き立てながら、破れた皮鞋も重さうに、鼓樓の階段を下り始めた。

波が脚を洗ふ城壁下、乾いた砂地を拾つて、眞黒な觀衆の山、演習の行はれる江邊へとブラリ／＼歩いて行く。

何時か街道をぞろ／＼と往來する人の間にもまれながら、小半時して、彼は潮頭が小山のやうに盛り上つては、ぱつと碎け、霰の如く散る江口近くへと辿りついて居つた。

「やツ、黃龍軍から先手の船を出したぞ。」

「おう、此方の紅龍軍からも船が出た。」

錢塘江を挟んで、黃龍紅龍の二組に分れた水軍、小山のやうな潮の寄せては散る灣口で、今日の晴の演習は開始されやうとして居る。幾萬か幾十萬か知らぬが、そこを取り捲いた觀衆、待ち

に待つた演習が始まると云ふので、わあツ——とあげた歡聲。岸といふ岸を埋めた黒山のざわめき、なだれるやうにどよめいて見えた。

開戦を知らせる矢筈しい銅鑼太鼓の音は、天地も覆へる程に響き渡つて、晴れ渡つた蒼空の下午後の明い陽光に黄や紅の旗指物がはためき、見渡すひろ／＼とした江面、兩岸から續々と櫓ぎ出だす兩軍の船影、高く低く碎ける潮に乗つて、相互に舳舳相觸れ、刻一刻と戦期は迫つて行くのだ。

士氣を鼓舞する軍樂の音はいよ／＼急調に、人々は片唾を呑んで、今にも開かれやうとする眼さましい水軍の接戦を待つた。

「こらツ、そこを退けツ、退かぬと、この棒を喰すぞ。」

夢中に見入つて居る觀衆の後から、突如に大音聲、嗚り立てる男が現れて來た。

はツとしたやうに、その附近の人たちが後を振り返ると、そこには臨時にかけられた水茶屋。酒に紅い面、髯にうづまる、六尺豊かな大男。憤りの眼ばかり光らして、太い棍棒を手にし、群衆を睨め廻しながらまた叫んだ。

「やいツ、俺の前の所、十間程を空ける。愚圖々々して居ると、この棒を喰するぞ。痛い目を見

ぬ内に皆退け〜。」

旅の浪人者らしいその大男。かう大聲に嗚りつけると、水茶屋の掛臺をのつそりと砂地へ、手にした四尺八寸の棍棒、矢鱈に群衆の頭上でびゅう〜と振廻し始めた。

「わあツ」と、云ふ恐怖の叫びが上がる。

十重二十重に岸邊に立つて居つた観衆は、この様を眺めると、さツと浪のひくやう、我がちに遁げ出だした。中には、

「あれえ〜」と云ふ女の救聲も混る。

急にその水茶屋の附近は、見物人が山崩を打つて、四方へわツと散つた。

「私など今朝から来て、折角いい場所を取つたと喜んでましたのに、あんな酔拂ひの浪人者が飛び出して、とんだ災難です。」

「お互ひさま、本當にこれから水軍の演習が始まらうと云ふ肝心な所で、こんな目に遇つては遣り切れませんな。」

棍棒に追はれて遁げ走りながらも、見物の誰かれはこんな愚痴を溢し合つて居る。

「こらツ、退けツ、土百姓共！ 退かぬかツ。」と、その大男は群衆が、蜘蛛の子を散らすやうに

遁げるのが、急に面白くなつたと見え、あちらにフラリ、こちらにヨロリ、濁みた大聲、向ふ見ずに棒を振廻しながら、岸に立つ黒山の人、片端から追ひ捲つた。

「やい、土百姓、よく聞けよ。俺を誰だと思ふのだ。天下廣しといへども、棍棒を握つては右に出る者ないと云はれて居る李鐵丸だ。天下第一の棒遣ひ李鐵丸とは俺のことだ。よく覚えて置け少林寺の道場で一と云はれた鐵丸だ。さア、俺の眼先に觸れた邪魔者ども、この棒で素首を叩き落して呉れるわ。」

興に乗つて、羊を追ふ狼のやう、なほも彼は見物を追ひ散らして歩くのだ。

「えツ、あ……あれが有名な李鐵丸先生ですかい?!」

「それにしては、何と云ふ亂暴な奴だ。」

「やツ、此度は此方に向けて遣つて來ましたよ。これは風向が悪い！ 彼奴が李鐵丸としたら、觸らぬ棒に祟りなした。」

遁げろ〜と云ふわけで、その李鐵丸と名乗る大男が、よろ〜と棍棒を振廻しながらヨロけてくると、見物はさツと道を開いて遁げ走つた。

こんな狼藉者が現れたので、朝未明から詰めかけ、待ちに待つた水軍の演習、丁度今が酣で、

黄龍と紅龍兩軍の兵船數百隻、入り亂れ、舳と舳、舷と舷が觸れ合ふ激戦の壯觀が開かれて居るにもかかわらず、その水茶屋附近の觀衆ばかりは、逃げ廻つて居るので、少しも落ち着いて居られない。

「やいッ、少林寺の道場」と云はれた棒遣ひの李鐵丸とは俺のことだ。さア何奴でも、この棒、受けられる者なら受けて見ろ！ 希みとあらば、何奴此奴の容赦はない、鐵丸が手の内、見せて呉れやうぞ。」

相變らず破鐘の大音聲、はりあげながら傲慢な態度、人もなげな振舞、女子供の見界さへつかないと見え、氣の向くままに西に東に、頭上でくるり／＼と棒を振廻して行くのだ。

「こらッ、小僧！」

ふら／＼する足、踏みしめて、轟乎と立つた自稱李鐵丸。

「その方はなぜ退かぬッ。退けッ、こ……この棍棒が眼に入らぬのかッ。」

そこには、外の見物人が皆ちり／＼ばら／＼に逃げ出だして了つた砂原、たつた一人、ボツンと突立つて、後向きのまま、平氣で水軍の演習に見入つて居る男が居る。

それから遙か離れた遠くから、この觀衆者の棍棒を怖れた觀衆、成行がどうなるであらうかを

氣遣ひながら眺めて居つた。

「小僧ッ」と、相手がバカに小さい男なので、急に威猛高な大聲をはりあげ「おのれは俺が誰であるか知らぬと見えるな。見ればどうやら旅の武藝者らしいが、何で邪魔立てをする？ 俺を少林寺道場の李鐵丸と知つてすることか。棍棒を喰つて痛い目見ぬうち、そこを退けッ。それとも鐵丸と知つて、立合が所望なのか？ 時と場合に依つては棒の一手や二手、指南して取らせぬものでもなッ。」

ふうーと酒の呼吸、長く吐きながら、キツと眼を据えて呶鳴つた。

「……………」

その男、依然として後を見せ、返辭一つしないで、江の面、入り亂れて戦ふ水軍の演習を興ありげに見入つて居るのだ。

「やいッ、おのれは嘔か聲か、俺の云ふことが耳に這入らぬと見えるな。」

それでも平氣なもの、どこを風が吹くかと云ふ様子、振向いてさへ見ない。

「小僧、もう勘忍がならぬぞ。」

眞赤に怒つて、づか／＼と砂地を二三歩前へ、右手の棍棒を取り直すと、

「これでも喰へッ。」

腰の骨も砕けよと、後からその小男を目がけ、力一杯に横に拂つた。

さつと身を退く飛鳥の迅さ。くるりと體を翻すと、それはたつた今、海寧城の鼓樓に立つて、遠く錢塘江を見下して居つた李鐵丸。これこそ少林寺道場一の棍棒遣ひとして、天下に知れて居る本物の鐵丸なのだ。

自稱李鐵丸が空を打つて、よろ／＼と流れた棍棒の尖、びたりと押へて、これはと狼狽する大男を尻眼にかけ、

「李鐵丸どのとやら、いや天下第一の棍棒遣ひと云はれる御人にも似合はぬこの亂暴狼藉、酒興にしては度が過ぎる。多くの人が豪く迷惑するではござらぬか?! お互ひが武を磨くも、百姓町人を困らせる爲めではござるまい。このやう大人氣ない振舞、見てゐても苦々しい。止めて下さりませ。」

「何……何だツ? 小僧の僻に餘計な廣言曝すな。俺を李鐵丸と知つて吐すのだな。」

「さア誰方にしても餘り見よいものでない。何れへなりとお退きとり下さい。」  
ボンと棒を跳ねると、またくるりと背を見せて、何も無かつたやうな様子。

周圍を取りかこむ見物人一同、これを見て、わツ／＼と湧き立ち、大聲をあげて悦ぶわけで、大男は一層にカツと逆上して、

「やい、重ね／＼無禮な奴、もう容赦ならぬぞ。おのれを棒の折れるまで打ち据えて呉れる。覺悟をしろツ。」

言葉も終らぬ内、後から本物の李鐵丸をのがけ、その腦天も砕けよとばかり、棒を振り冠り、えいツと一聲、打ち下した。

「五月蠅い御人ぢやな。それ程、生命が惜しくないか。」

さつと身を替しながら、大男の胴へ、どツと體を打ち當てると見るや、彼を砂地へ拵ち伏せて押へつけ、

「これツ、よく聞けよ。二つとない生命を仇に使ふ馬鹿者の醉、一遍で拙者が醒して呉れるわ。」  
さう云ふより早く、その威張り散らした自稱李鐵丸の襟上、むんづと握んで砂地をづる／＼と七八間、人々があれよ／＼と立ち騒ぎ、飽れ返る中を引き摺つて来て、深い浪打ち際、

「それツ、水でもうんと喰つて、酔でも醒せ!」手まりのやうに宙へ高く、すつぽりと五六間先の海中へ擲げ込んだ。

一旦、底へ沈んで浮き上つた大男へ、  
 「其方も少林寺の李鐵丸ださうな。拙者も少林寺の李鐵丸だ。珍しい對面であつた。ハツハツハ、見すばらしい姿の小男、本物の李鐵丸は高らかに笑つた。」

「うへツ、お……お助け……」

低物は浮きつ沈みつ、身をもがきながら眼を白黒。

### 三十萬兩乞食の大宴

「手前主人が賀壽のため、近郊近在五十里にわたる紳商豪族を招いでの一代之世の大祝典。是非とも先生のやう御高名な方に御列席を願ひ、一層に光彩を添へたく、お願ひに上りました。」

海寧城裡、福順客棧と云ふ宿屋に泊つて居る李鐵丸のことを知り、土地の豪族張祝伯から招待の使者が來たのだ。

「それは千萬忝けない。三十萬兩からの豪華な宴會、乾度席末を汚すでござらう。それから拙者には百三十人の門弟。それも共に祝宴へ參るであらうから宜しく願ひたい。」

「はッ」と云つたものの、使者は二の句が續けぬ位に眼を見張つて吃驚した。

「三十萬兩からの祝宴。たかが百や二百の入數が増したとて、さして御迷惑ではござるまい。何れも私の手足も同じ門弟子分ぢや。私同様と思つて取扱つて頂けば宜しい。」

これが迷惑でなくて何であらうかと考へた使者。突嗟の思案もつき兼ねたと見え、

「實は甚だ申し兼ねましたが、先生お一人と存じお招きに上りました次第、左様に多勢な御門弟衆がお居で遊ばさうとは、主人始め手前まで少しも存じませんでした。一應このことを主人へ相談の上、何分の御返事を仕りますから、暫く御猶豫を頂きたうございます。」

「何と申すのだ」鐵丸は何時になく氣色ばんで「そこ許はたぶらかしに參つたのかな。さんく、言葉は低くして、人の心を動かし、今となつてから考へた上で返答するとは何と云ふ愚けたこと、そこ許は唯今、張祝伯が名代と申したな。名代と申さば主人も同様ぢや。それが今更、前言を喰んで、土地で一と云はれた豪族張祝伯の名が立つと思ふか。そこ許の返答次第で、拙者にも考へがある。確としたお言葉をうけたまはりた。」

チリ／＼と使者へ詰め寄つた。

「はッ、お怒り御尤もにございますが、何にしましても、祝宴の日取も差し迫つた今日、百三十人からの御入數が増えましては、準備の運びも如何かと案ぜられます。」

「黙らつしやい。そこ許から宴會の準備の都合など承つて居るのではござらぬ。行つてよいか悪いが、それさへ聞けばよいのだ。」

「はい、そ……それが……その先生お一人……」使者の答へはしどろもどろ。

「分らぬ御人ぢやな。拙者を招けば、拙者の手足も一緒に参るのは知れて居る。一體そこ許は何の御使者に見えられたのか。」

「主人賀壽の祝宴へ、先生の御來駕をお願いに上りました。」

「それ、それならばよく分つて居る。拙者はお招きに預り千萬忝けない。屹度まゐると主人へ宜しく申し傳へて呉れ。それから、どいやうぢやが、先刻申した通り手足も共ぢや。」

「はッ……」

使者は放々の態で、李鐵丸の下を遁け歸ると、張祝伯へこのことを話した。今更となりどう引込みもつかないので、急に日取りの迫つた今日となり百三十人前の支度の増加、料理人は撤夜の忙しさである。

こちらは李鐵丸、使者が歸つて了ふと、直ぐと旅舎の亭主を呼んで、

「外でもないが、少し頼みたいことがある。今日中にどこか古着屋でも宜しいが、小洒瀟とした

長衣、百二十枚程を買ひ整へ、集めて貰ひたいものだ。」

さう云ひ置くと、彼はそのままブラリと客棧を跡に、どこともなく出て行つて了つた。

その内、町の噂に上つた豪族張祝伯が、賀壽の宴會の日はやつて來た。

その日、張邸の混雑、朝から續く綺羅びやかな車馬の列、何れも供人多く引きつれて、次ぎ次ぎに着到する。

大扉を開いた門の兩側、樂師の二組は今日を晴と芽出度い祝ひの音楽を互に競ふやうに吹奏するのだ。

浮き立つ音色は晴れた空高く流れて、門前近く、その沿道は賓客の行く、美しい車馬の行列を眺めやうと黒山の人である。

張邸の大廣間。そこには五百餘人を容れる卓子の上、東海産の老魚の鱠や海燕の巢、熊の手や松江の鱒など、見るさへ珍しい山海の料理が、何れも山と積れて賓客のくるのを待つて居る。

廣間の片隅には賑造りの舞臺が、天井から床まで、金にあかして作つた贅澤な設備、眼のくらめくやうな輝かしい裝飾、早くも卓について居る賓客たちの間、燕のやうに美しい女たちが銀壺を手にしては斡旋をし、酌をしては廻つて居つた。

一番に北寄りの中央の卓には、この日の主人である張祝伯、六十の賀壽を祝ふとは見えぬ若々しい面を晴やかに、その廻りを圍む賓客たちを相手に得意の話を進めて居る。

「李鐵丸先生はどうなすつた？ まだお見えにならぬやうぢやな。」

彼は、もう賓客の大方が見えたのに、まだ姿を見せぬ鐵丸のことを氣にして、側に立つて居る従者を顧みた。

「左様でございます。もうお見えになる頃と存じます。」

「張祝伯どの」と、側の賓客の一人は、主従のこの話を耳に挟んで「あの棒の名人、李鐵丸先生が、この席へお見えになるのでございますか。」

「左様」と、主人は一層に得意らしく「門弟百三十人を連れて、列席してくれと申し居りました。」

「えッ、門弟を百三十人?! それは豪い騒ぎでございますな。しかし先生ほどな有名な方と同席は、全く身の譽れ、御主人に取つても此の上ないお芽出たい事とお祝ひ申し上げます。」

何時か、この李鐵丸が百三十人の門弟を引きつれ、賀宴に列すると云ふ事が、賓客の口から口へ傳はり、好奇の心で一同は待つた。

その時、張邸の門前、薄汚い辻轎が百十數臺、列を爲して到着をした。そして最初に現れたのは李鐵丸。次から次と轎から下りた百二十三人、これがまた恐ろしい人間許り。

「お招きに預り李鐵丸、門人と共にまわりました。どうぞ御案内を願ひたい。」

邸内の正廳前、割れ鐘聲を絞つて、鐵丸は叫んだ。

「大……大變でございます」と、案内人の一人、轉び込むやうにして大廣間、主人張祝伯の側耳元で何やらを囁いた。

「えッ」と、顔色を變へた張祝伯、立ち上らうとする時、もうその廣間の扉口、李鐵丸が先に立つて、後からはその門弟の一行。

「李鐵丸どの。そのやうな者をこの賀宴の席へ連れ込まれてはちと手前、迷惑を致します。」

張祝伯は、彼の前に立ち塞がるやうにして云つた。

「何と仰せられる？ お招きに預つて参つたのに、この席へ這入つてならぬと仰せられるか。」

「されば、先生の御門弟と承つたのに、お引き連れなすつたは非人乞食の群。ここにお居で遊ばすお客さま方は、何れも近郊近在切つての上流の方ばかり、そこへそんな穢い人間どもを……」

「黙らつしやい。見かけは汚い襤褸を纏ふ非人でも、心は立派な者ばかりだ。身に千金の絹を飾

つても、心が乞食に劣る豪族紳商が多い世の中、少しも御遠慮には及ぶまい。強つてこの席へ入れぬとあらば、力づくで彼等門弟共を追ひ返して貰ひたい。假りにも拙者が手足、辱しめられるを黙つて見ても居られまい。棒の續く限りお相手を致し、修羅の庭として屍骸を築くばかりだ。殊に御覽せられよ。あれあの通り、門弟どもも貴殿が賀壽を祝ふて、悪工面してまで身に洒瀆とした長衣を纏つてきてるではないか。」

「そ……それは……」張祝伯も鐵丸を立腹させては一大事、答へに窮してゐるのを見て、

「皆のもの、さア遠慮なく空いた卓へ割り込んで、御馳走になつたらよいぞ。」

鐵丸のその言葉、待ち兼ねたやうに、

「お有り難うございます。」

「右や左のお旦那さま、お有難うございます。」

ぞろ／＼と繰り込んだ一行——跛者、めつちち、手くねにいざり、梅毒で鼻の落ちたのと癩病で眉のないのや指の腐つた男たち、一人として満足な人間は居らない連中、我勝ちに卓へ割り込むので、賓客たちは面を背け、鼻を撲つ悪臭に何時か一人立ち二人立ち、三十萬兩をかけた大宴会場、主人張祝伯の邸の者と李鐵丸一行ばかりが残つた。

## 客棧白話

一

その晩は、本當に珍しいことで、久し振りに日本人である賣藥の行商をして居る三十五六位の年配、九州生れの男と同宿になつた。

かれこれ二ヶ月近く、奥地である田舎廻りばかりして居つたので、町らしい町へ出る事も少かつたし、こちらは北支那と違ひ、日本人が一體に少いので、縛られたやうな旅を續けながら、豫定の調査に従つて来たが、何しても、こんな所で、恚うやつて、あかの他人ではあるが、日本人に遇ひ、互に祖國語で話し合ふことは、耐らなく悦ばしいものであり、なつかしいものだ。彼は最初、餘りに支那服がびつたりと身につけて居り、藍色の長褂子から黒い褲子、竹の柄の

彼等はこれを幸ひとばかり、喰ふわ飲むわ、腹一杯つめ込んだ上、頭陀袋へ菓子から皿まで土産に頂戴するのも現れると云ふ大騒動、鴛澤に流れる豪族の頭上、一大鐵鎚を下したと云ふ奇俠李鐵丸のお話はこれでをばり。



パイプで、葉煙草の煙を吐きながら、炕に胡座を組んで居る様子を、一眼見た時は、什麼しても支那の旅商人とより外には、思はれなかつた。

ところが、これは後に話し合つてから、大笑ひしたことであるが、向ふでも、私を最初は、支那人と考へたさうだ。最も、在學中から同窓の誰彼は、私を指して、よく支那人型と云ふのを耳にして居つた。

こんなわけで、彼が私を一見して、支那人と誤認したのは無理もないと考へるが、丁度、その時、客棧には私と彼の外に、もう一人、苦力風をして居る支那人が泊つて居つた。建坪が八坪位はあらうと思ふ、その宿屋の中央、出入りの扉口から右と左に分けて、通路の土間がとつてあり炕のある二間に仕切つて、左手は宿の者の住居らしく、右手が唯一の客室である。

木賃宿よりは、もう一層にひどい客棧であるが、支那では、少し奥地へ足を踏み込んだならばこれより外には泊る所がないのだ。こんな宿屋でもある村は、まだく結構な方である。

夏は泊り賃が銅子兒二枚——銅貨二錢ですむが、冬は炕に焚く薪代を二三錢取られるので、大抵は五錢が定のものである。その時分は、もう炕の下は別に焚かなかつたが、泊り合した旅客たちが、てんぐぐに自炊する事になつて居る。かう云ふ客棧の規則として、客がありさへすれば、

炊事の煙が客室の炕の下をぬけるやうに構造してあるので、寝る頃になると、炕はいい加減にボカ／＼とぬくもつて來た。

日本では彼岸過ぎの季節で、北支那と違ひ、この邊の陽氣は割合に暖かであつたが、何しても四方が山で圍れて居る四川省のこと、時折は肌をさすやうな寒い日がある。その日も朝から晴れては居つたが、かなり寒い日であつた。

客室の内には、豆油のカンテラが一つ、柱にかけてあつて、細長い焰と油煙とをあげながら、黄褐色に薄ぼんやりと、そこら一面を照し出して居つた。

頬骨の高い、髻でうづまつて居る細面が雪に焼けて、紫黒色の艶を帯びて見える。眼ばかり光る賣藥行商の男——東海林直次と名乗つた彼は、私と汲んだ焼酒の酔が廻つてくるに連れ、すけた天井のない屋根裏を睨むやうに見あげながら、油でいためた豆腐や生葱を嚙つては、世間に容れられない不遇を、好人物らしい口調で、ぼつ／＼と語つて居つた、が急にキツとなつて、腫を輝かし、彼が一世代、再び得られぬであらう過去の幸福な時代の追憶に就て話し出した。

「本當に面白かつたのは、あの頃だ。恐らく二度と再び、あんな時代は、俺に廻つてくることは

あるまい。」と、彼は冒頭した。

私が、錫の壺から酌いでやつた焼酎が、彼の手にする盃から溢れて、たら〜と炕の上、アンペラの敷物をぬらした時、さも惜しさうに眼を落しながら「酒だつて、それは好い酒が飲み放第だつたのだから……」と、感慨深さうに言ひ放つた。

「丁度、今から七八年も前だ。日露戦争が終つて間もない頃のことだつたと思ふが、やはり賣薬の行商をして、この四川から雲南の境である金沙江の流域を遡つて行つた。」

彼は、初対面の私に對してさへ、こんな風に無慮な口を利く程であつたが、何處か親しみを起させる、不快を感じない話振りである。しかし一體に、支那の奥地を渡り歩く賣薬行商人は、その實、もぐり醫者と同じ仕事をして歩くので、彼等が行く所、地方人から太夫として、相當の敬意を拂はれて居るので、日本の醫者が、如才なく尊大ぶると同じ態度が、自然に身について居るのもあつた。

「君は、まだあの方面へは行つたことはあるまい。さうだらう」と、獨りで黙首いてから「日本人で自由に這入つたのは、俺ぐらゐなものだ。今までに乾度、誰も入り込んで居るまい。何しても、あそこへ這入るには生命がけだから。例の危険な人種が住んで居る西藏の東部に接して

四川から雲南の邊境、金沙江流域の山間や崖腹に巢喰つて居る奴等は、日本で云ふと山窩とでも云ふ特別な住民だ。支那では、獐獐と呼んで居るが、彼等はアイヌと同じに、支那でも最古の高地族で、昔は九黎三苗の遺裔であり、中國邊の土着民であつたのを、黃帝が南嶺一帶の深山幽谷へ追ひ捲つてしまひ、だん〜に廣東、廣西と住む所を失つた彼等は、到頭この邊へ竄入して來たのだ。普通の人間では、とても居住することの出来ない峻険な高山や深い溪谷に、土窟を造つて住んで居るので、彼等が險しい山路を歩くのは、まるで平地を履むと同じことで、猿のやうな奴等ばかりだと考へて居る。その仲間へ、毛色眼色の變つた此の俺が、遠慮なく這入り込んで行つたのだ。どんな騷動や波亂が、彼等の部落に捲き起つたか、想像して見るがいい。」

しかし、私は支那の山窩に就て、何も聞いて居らなかつたので、大して想像し得る材料も持ち合さなかつたから、黙つて居つた。

「兎に角、豪い騒ぎが起つたのだ。支那人でさへも、滅多に困難な路を冒してまで、這入り込む者がない位な其處へ、二ヶ月近くも山から山の背を傳ふやうな、危険な藝當を繰返して、見馴れない俺のやうな男が現れたのだから、かなりな驚異を興へた。しかし俺の方も、雲南と西藏の境には、山窩が居ると云ふ事は耳にして居つたが、いざ彼等の姿を見出だし、怪奇な住居の前に立

ち、支那人とは何處か風貌の違つて居る有様を見ると、反つて薄氣味悪い感情と、來ねばよかつたと云ふ風な後悔が先に立つた。そして彼等とは、言葉がてんで一ことも通じないのだから、一層に心細く、危険が身に迫つて居るやうに思はれ出した。彼等は遠捲まに、俺の姿を圍んで、怪しい叫びをあげては、一齊に刃向つてでも來さうにする虚勢を示すのだ。今となつて、遁げ出だせば、屹度殺される事は、眼に見えて居る。そこで俺は大膽に構へてしまひ、山峽の平地に集つて居る彼等の群へ、敵意のないのを示す爲めに、笑ひながら靜に近寄つて行つた。が彼等の内、どれが男で、どれが女なのか、そしてどれが酋長なのか、一向に眼當てがつかない程、同じ服装で、同じ容貌の持主らしく思はれるのだ。どれを見ても割合に立派な體格で、面長な褐色、眼が大きく、頬骨が突き出て、鼻の恰好が弓なりに廣い。それで一人として鬚のあるのが居らないのである。もつとも、これは後に分つたのであるが、彼等は鬚や髯はすべて抜いてしまひ、顔に一本をも留めない風習があるのだが、その時は、そんな事は知らないで、頗る奇異に感じた。穴居して居るので、齒は凄いやうに白い。それに橙黄色の髪は、一束ねに總括して、頭の上に集め、綿布でぐる／＼とそれを覆ひ捲いてあるので、犀の角のやうに見える。長いになると、頭上に突立つて居る髪の角が、九寸位はあらうと思はれるのだ。そしてこれも後に分つたのだが、

彼等が髪を大切にすることは、朝鮮人の冠帽以上である。」

彼は、この話の合間、盃の焼酒を嘗めながら、葱の白根をガリ／＼と嚙む事を止めなかつた。「着物と云ふたならば、鼠色と黒色の二色きりだ。袖のない上衣は、甚だ簡単な仕掛で、頸の周圍が紐でくくり集めてあり、踵あたりまであらうかと思ふ長いのを、ゾロリと着て居る。地質は毛布と綿布との二種であるらしかつたが、俺は、この一團の怪しい服装と珍しい風習の持主である山窩の側へ、ぐん／＼と近寄つて行つた。ここで俺は危く一命を奪はれる所であつたが、本當に偶然な機會から災難を逃れて、しかも急轉直下、一世代の幸福な時代に廻り遭ふことが出きた。」

## 二

彼は、一世代の幸福と云ふことを、今までに二度か三度、繰返したやうであつたが、鬼とでも取組みさうな偉大な體軀の持主であり、裏に優しい情話でもありさうには、什麼しても想像し得ないだけ、私はその言葉に就て、奇異な感を抱かせられて居つたし、多少の興味をも呼び起して居つた。

「彼等は」と、ここで一段と聲を張つて、山窩をよびかける調子で、彼は前からの話に續いて、語り出した。「私が平氣で近寄つた時。その狸の一團から四五人が、ブツと二三歩、前へ進み出ながら、手には自然木の棍棒や双尖の太い、鋭い刃などを握つて、何やら切りに大聲で叫んで居つた。什麼ならうとも、今となつては、彼等の自由になるより外に仕方がないので、私は矢庭に地上へ跪き、一揖をした。とづか／＼と側に寄つたその人たちは、急に私を押へつけて了ひ、藤蔓を編み合した太い縄で、高手小手とでも云ふか、滅多矢鱈にぐる／＼と身體の自由が利かない程、縛へて了つた。それから什麼なるのか、それはもう殺されるのだ。どのやうな方法か知らないが、屹度殺されるに違ひないと、情ないわけであるとは思つたが、観念してしまつた。すると間もなく、怪しい服装と容貌をして居るその一團の山窩に引つ立てられ、無理から引きずられるやうにして、その山峽の平地から、険しい山路を小半時も追立てられ、山の中腹らしい所、廟らしい粗末な建物、鉦と云ふものが一向に掛けてない、自然の樹幹そのままが組み合して、屋根には樹皮や獸皮が葺いてある家の前へと連れて來られたのだ。」

その時、居間の仕切りとして、ぼつたりと綿でも入れてありはしないかと疑ふ程、重さうに厚ぼつたく垂れて居る帷を、少し斜によせて、宿の主らしい老人が、胡麻鹽の辮髮頭をのぞかせて

「お客さま。まだお寝みでないかネ？ カンテラはお消しになつて下さいよ。」と、聲をかけた。

私は、軽く二三度頷いてみせて、その意を汲んだことを、無言で知らしてやつた。

合宿の苦力は、私たちの日本語での話に興を持たないので、隅の方の壁により、彼自身が背負つて旅する、薄い布團に柏餅のやうにくるまつて、少さく寝込んでしまつた。

滿洲や南支那のやうな、繁華な町の停車場。列車の發着毎にブラットホームを、大きな夜具包みを背負つたり、抱へたりして、右往左往、われ勝ちに乗り込まうと、先を争ふ滑稽な光景は、奥地を旅した經驗のある者には、決して笑へない、氣の毒な事だとさへ考へられるのだ。

それは、恚う云ふ客棧になると、夜具一枚、枕一つさへ貸して呉れないのだから……と云ふ譯で、私なども、その時はやはり、二枚續きの毛布を一枚、旅の品と一緒に背負つて、歩き廻つて居つたのである。

「奴さん。もう寝んだやうだナ。」と、彼は今更、氣づいたららしい態度で、くるりと背を見せて、向ふの壁側を見遣りながら「先刻、この男の話では、錦江を廻り、明後日は成都へ這入れるのだと、大變に喜んで居るらしい口振りだつた。」

「さうか。それは丁度いい。私も成都へ出る豫定なのだ。」

「では、いい途連れぢやないか」と、彼は急に語調を變へて、「で、最前の話だが、彼等が私を  
 廟らしい家の前へ連れて行つた。そしてそこへ座れと云ふ風に、一人の男らしい、大きな奴が頸  
 で示したので、その通り、地面へ座つて了つた。幾ら何かを云つて見た所が、てんで話の分るの  
 は一人も居らないのだから、黙つて、態度と表情で、こちらの意思を示すより方法がない。さう  
 かと云つて、兩手は自由が利かないのだ。仕方がないから、檻の熊のやうな具合で、切りに頭を  
 下げては、生命乞ひの哀願を試してみた。そこで彼等が何事かを、ガヤ／＼と一切り騒ぎ立てると  
 その廟らしい中から、一人の尊大振つた老人が現れて來た。それがこの山窩の一部落、酋長より  
 も或る場合には、權勢がある師巫と云ふ坊主とも、行者ともつかない、變態の神使ひであると云  
 ふことが、それも後に分つたのである。しかし此奴が、俺を什麼するかと云ふのが、氣懸りで仕  
 方がない。チツとその者の様子を見守つて居つた。しかし頗る意外に感じたことは、彼が私の前  
 に立つた時、腫の底には、いかにも怒れむやうな色の流れて居るのを知つた。そこで、此奴に繼  
 るより外に途はないと考へたので、前よりも一層、頻繁に頭を下げに見せた。が別に、私の縛め  
 を解いて呉れやうともしないで、すいと、彼はそのままに、廟の中へ引き返して行つてしまつた  
 甚だ飽氣ないが、前途のことは、一層に心配である。そして再び、彼が廟から姿を現した時、手

には三尺位な、木の棒を握んで居るのだ。その廻りをぐるりと取り圍んで居る山窩の連中。俺  
 をここへ縛めて來た奴等は、それを見ると、急に一齊に地上へ膝をついて、頭を垂れ、兩手を高  
 く、空へあげた。まるで耶穌教徒が祈禱でもする恰好である。師巫は立つたまま、その棒を双手  
 で捧げるやうに高くあげ、廟に向つて、祈禱か呪文か知らないが、何やら其に似寄つて居るやう  
 に感じられた短い文句を吐いた。この時、俺はいよ／＼最後が來たのだと思つたのは、その太い  
 棒である。あれで、俺の頭上に一撃を喰はして、狸の秘密を探りに紛れ込んだ異人を血祭りに  
 する。それを今、神に告げて居るのだ。さう考へると、俺は小供の時から、随分大膽な方ではあ  
 つたが、そこは人間の意氣地なさ。今、殺される間際まで、理由が一向に分らないだけに、逃れ  
 るだけは逃れやうとする氣が胸に一杯。切りに誰彼の區別なく、周圍に居る、犀の角のやうな頭  
 をして居る彼等に向つて、頭を下げ居つた。と全く豫想外であつたのは、師巫の呪文が終ると  
 同時に、彼の手にした棒は、空高く投げあげられた。そして其が地上へ落ちて來ると、先づ彼が  
 その棒へ脚を据ゑた。まはりの山窩たちも一緒に立ち上つて、その棒の上へ視線を集めた。いよ  
 く／＼これからが大變なのだ。その師巫は暫く地上に落ちた棒のさまを見詰めて居つたが、前より  
 は一層、澤山に集つて來た山窩の人たちに向ひ、更に何やら分らない數語を話したのだ。と彼等

はさも意外さうに、俺の方に眼を向けた。その様子を見て居ると、ホツとしたやうな安心を覺えたわけ、先づ生命拾ひをしたと云ふ感じがしたのである。所が間もなく、彼等の内の一人が、黒い小鳥を一羽、それが何鳥か知らないが、雀よりは少し大きい位な鳥で、羽翼に艶のない所を見ると、鳥ではないらしいのだ。師巫は、その小鳥を引ッ握むと、突然に手にした竹片を、双翼を貫くやうに突き刺してから、怪しい咒文を、前と同じに繰返し、群衆が祈禱する敬謙な態度で地上へ跪くと共に、それを廟の屋上を目掛けて投げあげた。そして小鳥がバタ／＼と羽根を動かして、什麼しても飛び得ない様子を、チツと見守つて居る。そこでも暫く経つてから、俺の方をチロ／＼見ながら、師巫は彼等に何やらくど／＼と怪しい説明を始めた。先刻から俺は縛へられたまま、この奇怪な所爲を黙つて見て居るのだが、捧と云ひ、小鳥と云ひ、何を意味するのか、さつぱりと分らない。その實、この馬鹿々々しいことが、俺の生死を分つ重大な意味を持つて居つたのであると云ふことを、後に聞き知つてから、吃驚したのであつたが、人間の生死と云ふものが、案外詰らない事から定められる、神の氣まぐれ、運命の當てにならなさを、つく／＼と感じた。それで、俺はなほも放免にならない。此度は前よりも變な所爲を遣り始めたのだ。やはり彼等の一人が、牛か馬の骨らしいのを二つ、師巫の手に渡すと、彼は依然として、いかにも尊大

ぶつた態度で、それを恭しく、廟前の敷石の上に置き、枯枝を集めた中で、火をつけて焼いたのである。そしてその灰燼の跡を、チツと前のやうな様子で見詰めて居る。そこでも彼は、また土人たちに向つて、何やら一場の説明を與へて居つた。何時まで、こんな妙なことはかり繰返すのか分らないが、俺は生命さへ助かればよいので、萬邊なく、師巫から土人たちに向つて、ここへこと切りに頭を下げて居つたわけだ。それから次に、かの師巫が、俺に強要をしたことは、大變に氣持の悪いことであつたが、彼が無言で示す通り、一人の土人が手にする、くりぬきの碗から一握みの黒米を口に含んで、さん／＼に噛み砕いてから、パツと地上へと、それを吐き出してやつた。所が、その米粒の散つたのを、かの師巫や土人たちが、熱心に見つめ出した。本當に、何と云つていいか、無氣味なことばかりである。」

彼は、ここまで話した時、錫の壺が何時か、すつかりと空になつて居るのを知つた。

この話の間、私と彼は絶えず、營めるやうに焼酒を、盃からチビリ／＼と汲んで居つたが、今は、隣室の宿の者も、寝んだらしい模様なので、更に呼び起すのも氣の毒と、酒はこれで、切りあげる事にした。

西洋紙の紙片でも、バサ／＼とまるめる調子で、彼は葉煙草を竹の柄のパイプに太い親指を巧

に動かしながら、詰めては吸つて居つたが、  
 「でも、それだけで嫌な試みは済んだと見え、俺の縛めを解くと、師巫が手を取つて、いかにも前とは變つた親切な態度で、その廟内へ連れ込んだ。土人たちはガヤ／＼と囁き交しながら、表の口へ黒山に集つて居る。」

## 三

「これから、手短かに、彼等が何であんな妙な所爲ばかりをしたかと云ふことを話さう。それは獐獮の一族は佛教を信じないのだ。今でも彼等に傳統して居る固有の宗教があつて、この師巫が一部落の信頼を受けて、吉凶禍福の判断をする。彼が最初に、棒を投げたのは、俺が何所から来たかを調べた上に、棒の向く方角によつて、善か悪かを極めた。そして小鳥を屋上へなげたのはそれが飛び去るか否かで、この俺が神の遺すものであるか、魔の寄越すものであるかを、まるでお伽噺の具合で、調べられたのだ。それから焼いた骨の模様によつて、俺が部落へ災禍を残すか幸福を持ちきたすかを判断した。あの黒米を嚙んだのは、一層に危険なわけだったが、地上へ吐き捨てた米粒の一つにさへ、少しの血點を留めて居らなかつたことが、彼等はすつかりと安心を

してしまつたのだ。すべては師巫の行ふ山窩の迷信の試験から、俺は些の缺點もない、善良な、神の寄越したものととして、満點で及第をしたわけなのだ。これらは何れも後になつて分つたことであるが、恚うなると、俺は絶大な敬愛を、彼等から受けることになつた。その上に師巫は、幾らかの漢字を知つて居つた。これが俺に、土語を覚えさせる便宜となり、僅かの間に、彼等と簡単な話をする事も出来るやうになつた。始めに、廟へ連れこまれた時、師巫は叮嚀に、俺を臺へ腰かけさせ、この部落に珍しいところの紙と筆とを持ち出してから、  
 「儂做甚麼生活乎」と、漢字を書いて見せた。これを見て、俺は蘇生した思ひで、雀躍したと云ふのは、この山窩の中に、漢字を知つて居る者が在るとは、全く思ひがけない事であつたから、筆談でもいい、こちらの意思さへ通じる事が出れば、もう縮めたものだ。そこで俺は早速に、  
 「我是東洋君子國之産、行仁術、治萬病、施靈藥、退惡疫者也」と、大きく吹いてやつたのだ。ところが、これは直ぐと、師巫の口から土人たちへ告げ知らせられた。それから俺は、まるで大切な物でも扱ふやうにされ、廟の内に起臥し、土人たちから持つてくる牛や羊、豚肉などを常食とし、彼等の間に昔から傳はる一種特別な醸造法による大麥や小麥から造る酒の美味を汲んで、吞氣に日を送つて居つた。米も相當に貯藏されてあるので、その部落での生活は、本

當に會て無かつた幸福さを知つた。その内にだん／＼と男女の別が、見分けがつくやうになつたが、俺が最初、この山窩境へ足を踏み込んだ時、犀の角の頭をして居つたのは皆、男子であつて女子は長い髪を二條に編んで、頭の周圍に束ねて居る。上衣は短い方だが、綺麗な裝飾が施されてあり、長衣を着て居るのは、前の垂れた、裾が地に引きする位に長いのがある。履もそれ／＼に好みの刺繍があつて美しい。が娘時分は、すべて履をはかないで、大抵は跣足で歩く。しかし器量は西藏の女なんかよりは、遙に窈窕とした美人が少くない。加之にこんな高山に住んで居る割に、色の白いのが多いのも不思議である。そして女子の権利が、男子よりも一層に上にあるやうに思はれるのも、可笑しいことの一つだ。女子は男と同じに、やはり掠奪にも加はり、他の部落との戦争にも出るのだが、女子が男から激しい侮辱を受けたと信じた場合、かの女は酋長の前に出て、かの女の上衣を脱いで、地上に敷き、そこに跪いて告訴する時は、その行爲に對して、絶對の權威が附與されてあるらしいのも、男子が嚴罰に處せられると共に、女にとつては、この上のない都合のいい事である。そんなわけで、女子は一體に男よりも威張つて居り、勢力があるのだ。だから小供が生れても、男だと冷淡に視るが、女だと、一家中が歡んで祝ふのは、西藏に似て居る所がある。そして小供が生れると、直ぐと初湯の代りに、成長してから膽が太くなるや

うと云ふ迷信から、その頭を牛の尿で洗ふのだ。考へてみても、汚い話だが、彼等はそれを出産に伴ふ、有り難い儀式の一つと考へて居る。さうかうして、俺が山窩部落に入つてから、半ヶ月程も経つた頃のことだ。師巫との筆談によつて知つたのであるが、彼が廟前での判斷に従つて、その酋長は、土人を引きつれ、西藏の境を越え、西藏の土人を襲ふて、掠奪に出かけることになつた。これが、この部落で、一度に掩の名聲をあげ、えらい信用を博することになつたのだ。彼は語り疲れたらしい様子で、一寸、口をつぐんだが、ぬるい茶に口をしめすと、何かかうチツと、頭をかき上げて、聴き耳を立てた。私が、かなり遅く、宿についたのであるから、夜も大分更けたらしい。

話が斷切れると、急に四邊の森閑とした物淋しさが、襲ひかかるやうに身に迫つた。さう深い山の村ではないが、風がない夜だけに、一層に濃い寂寥な影は、壁に、天井裏に、炕の陰に、ぼんやりとカンテラの光に照し出されて居る私と彼との身の廻りに、漂つて居つた。

「狼が吠えて居るナ。」彼は沈んだ聲で云つた。  
それは、遙か遠い方面で、犬の吠えるのとも違ふ、長く、鋭い、うなり聲が幾つも／＼續いて聞えた。



「この村へも、夜半頃になると、よく山の奥から出てくるさうだ」と、彼は言葉を付け加へた。が急に氣を取り直したやうに元氣な調子で「狼のことよりは、山窩の話を書いてしやう。しかし面白くないやうなら、止めるが什麼する？」

「大層面白いと思つて、聞いて居るのだ。今夜一晩でも、話して貰ひたい。」

「ところが、どうやらカンテラの油も追つけ切れさうだ。壺に油のある間、では話すとしやうさ。」

彼は、葉煙草の煙をゆるく吐きながら、前とは話し方を變へ、その要點だけを掻いつまんで行く風で、語り出した。

「俺の入り込んだ山窩部落は、男女から小供まで括めて、五六百人位は居らう。その中から撰りぬいた強壯な男女二百人ばかりが、西藏へと掠奪に出かけた。そして十日程経つて、彼等がいろ／＼の獲物を奪つて、引きあげて來た時、當時の酋長であつた老人が、途人で病死してしまつたそこで酋長の選挙が、その部落で行はれることになつたが、今まで、その土人の間で、一番に年長者が酋長になつた次には、彼等の部落での少壯者が酋長に選ばれる。そしてその次は年長者と云ふわけで、これは不文律だが、彼等山窩の間には、規定されて居るのだ。そこで、その少壯者

を選ぶ段になつたところ、此度の掠奪で、一番に勇猛な働きをした若者、年頃二十四五位のが、酋長に擧げられる事になり、俺の居る廟前で、その儀式が行はれた。その酋長になつた若者と云ふのは、曾て俺が、山で受けた腕の傷を治してやつた事のある男だ。加之に、此度の掠奪遠征でやはり多くの負傷者を連れ歸つて居つた。それを片端から、俺が荒療治をしてやり、治してやつたが、何しても彼等は從來、藥らしい藥を用ゐて居らないでも、自然に治癒して居つたのを、俺が來た爲めに、苦痛が少く、早く治ると云ふわけで、師巫につく豪い者と云ふやうな、特殊な感情を抱くやうになつた。その上に新しい酋長は、俺に多少の恩を感じて居るので、別の親しみと愛とを寄せて呉れた。彼等の多くは、平生、牧畜と農業とに従つて居るのであるが、大膽な、亂暴な仕事をするので、絶えず外傷を受けて、俺の藥を信じ、俺の力に頼つてくる者が多くなつて來た。酋長から土人まで、こんなわけで、俺を信頼することが、それは實に素晴らしいものである。」

彼は、話を切つて、その頃を回想でもするらしく、得意さうな隙をチラと輝かした。

「これは話が枝道にされるが、その部落で酋長になると、三人の妻が公然と持てるのだ。そして次長は二人の女、普通の男たちは一人であるから、俺たちの日本と變らない。それで、その若者

が酋長になつて間もなく、三人の新婦を迎へることになり、その饗宴が、或る平地で行はれた。鼓と云ひ、四ツ竹と云ひ、何れも極く簡単な樂器であつたが、三日三晩、平地に近い、俺の宿つて居る廟前で、悲哀を帯びて居る唄を、土人たちが十數人で繰返しながら、怪しい手振りで、樂人を中に、圓を描いて躍り狂ふのだ。彼等は一切り躍つては、ゾロ／＼と引きあげて行くと、また間もなく新しい躍り手が輪を描くと云ふわけで、三日の間、毎日のやうに、そんな事が繰り返されたが、最後の日、三人の新婦が酋長に連れられて、廟へ詣つた時、躍り手の數は恐ろしく増して居つた。その新婦の中に一人、俺は頗る意外に思つた娘が居るのを知つて、何とも云ひやうのない恐怖を感じた。そして俺は、直ぐと夜の、その山窩部落を逃げ出だしたのだ。それに就て、俺は詳しいことを話す必要もないが、二ヶ年近い間、女好きのこの俺が、少しも女の肌を知らなかつたと云ふ事と、部落の女の美醜が見分けられるやうになつてから、彼等に怪しい愛着を感じ、心をひかれたのは無理もない事である。そして土人たちは絶対の信頼を寄せて居るし、無論女の内には、好意を持つて居る者も多くあるのを知つた。何も知らなかつた土人の美しい娘に結婚前に女だと云ふことを教へたのは、屹度俺の頭上に恐ろしい制裁の下ることを覺悟して居らねばならない。しかもその娘が酋長の新婦に選ばれたのだ。そしてその娘は、既に普通の身體で

ない事を知つて居つたが、かの娘は、その點に就て、殆んど無智と云つてよい程な、年若い女であつたから……。すべては先づ、その酋長になつた若者が知り、部落民が知り、吃驚し、憤怒し、どんな大事件になつたか、その後の事は知らないのだ。野蠻な割に、男女の情事に就ては、頗る嚴格な彼等のことだから、定めし大きな騒動を起したことだらうさ。」

彼は淋しさうな面をして、最後の一句を云ひ終つたが、

「囃子鳴物の入らない白話だ。素話だから、とんと引き立たない事だつたが、カンテラの油も盡きさうだ。そろ／＼と寝ることにしやう。」

支那黃龍船 (終)

昭和四年十一月十五日印刷  
昭和四年十一月十八日發行

(黃龍船)

正價金壹圓五拾錢

著作權所有



著者 米田華舩

東京市麴町區麴町三丁目二番地

發行者 福田滋次郎

東京市麴町區三番町六十八番地

印刷者 鈴木清三

東京市麴町區三番町六十八番地

印刷所 日本書院印刷部

發行所

東京市麴町區麴町三丁目二番地  
電話九段二〇九一番  
振替東京一二〇八六番

日本書院出版部

目書評好院書本日

矢萩富橋	支那馬賊裏面史	正價二・〇〇	送料一二
西岡士郎	滿蒙活躍秘史	正價一・五〇	送料一〇
鄭氏	溫突夜話	正價一・五〇	送料一〇
水谷次郎	日本三千年史蹟	正價二・五〇	送料一八
同	大日本勤王史	正價一・五〇	送料一〇
同	明治大正裏面史	正價一・五〇	送料一〇
今村秋紅	日本美女禮讚史	正價一・五〇	送料一〇
山崎有信	幕末血淚史	正價一・五〇	送料一〇
樋口麗陽	大日本裏面史	正價一・〇〇	送料一〇
藤森花影	幕末明治裏面史	正價一・〇〇	送料一〇
石田龍城	明治秘話	正價一・五〇	送料一〇
町田柳塘	ユイモア日本史	正價一・五〇	送料一〇
樋口麗陽	大日本國辱史	正價一・五〇	送料一〇
同	嗚呼日本未來記	正價一・五〇	送料一〇
水谷次郎	井伊大老の死	正價一・五〇	送料一〇
蟻川新	小栗上野の死	正價一・五〇	送料一〇

596
169

